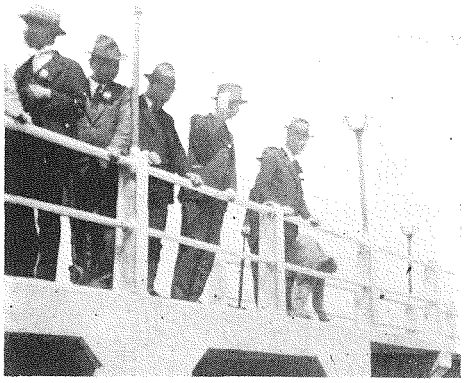
（1） 佐久發電所倶部にて晝餐中の一行、右端より稻垣氏、中川博士、那波博士、



（2） 調整池オバーフロー視察中の一行

佐久發電所から榛名まで

土木學會第十五回視察旅行雜記

○

夜來の暴風雨も竭んだが空模樣はまだ怪しげである、ステッキ代りに洋傘を提げて出る。五月十日土曜日のラッシュアワーであるが、午前七時前の山手電車は餘り混んでゐない。上野驛で下車するとき自分の後に井上秀二氏の輕裝姿が見えた。井上氏は一昨年の富山縣視察團の團長であつた。

○

工事中の上野驛は、假驛を使用してゐるので、相變らずゴタ々々と乘客が混んでゐる。屋内に臨時に設けられた土木學會の受付に顏を出して淡黃色の造花のバラを貰ふ、此が團員章である。昨年までは番號の付いたリボンであつたが、今年の造花は氣が利いてゐる。

○

七時前から會員は詰掛けたと見え、副會長の眞島博士や其他先輩連中の顏も大分見えてゐる。珍らしく中川會長の姿も見える、近年土木學會の視察旅行に會長が參加する事は暫らく途切れてゐたが、中川博士眞島博士が揃つた事は實際珍らしい事である。

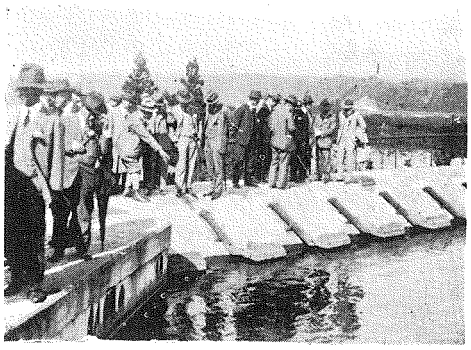
○

高崎廻り水上行の列車に二等車二輛を連結されてゐるが、他の乘客がないので二輛とも土木學會の團體で專用の有樣となつた。今日の案内役として關東水力側から鶴田勝三氏、杉本好太郎氏、東電側から神原信一郎氏、森忠藏氏、鐵道省から星野茂樹氏などである。一行約六十人、車中談笑の間に汽車は荒川を過ぎ、大宮、熊谷も何時の間にか過き武藏野の雜木林の新綠に目を嬉す人もあるが、車内の雜談は中々賑かである。然し毎年一行中に其人ありと知られた、關西の西出氏や、東京の那須氏、それに會の主事が一人も見えないのは頗る物足りない事である。

○

一行の色別を見ると內務省側から中川會長を始め眞田東京土木出張所長、土木局第二技術課の谷口氏、信濃川工事の宮本博士等で頭數は割合に淋しい。

鐵道省方面の人は第二改良所長たりし稻垣氏、研究所長たりし那波博士や、橋本第一改良所長、平井改良課長、松村東鐵改良課長、森川東鐵保線課長、中山上野保線所長、星野東京建設氏などで、鐵道方面は可成り賑かである。水力電氣方面では三菱顧問の井上氏、臺灣電力の田中氏、大井川電力新井氏、東電の神原氏東邦の畠山氏其他水力方面の人は中々多い。市役所からは小野東京市水道局工事



（3） 澁川發電所の水槽視察中の一行

（4） 榛名山上の見晴に立てる一行、左端より中川博士、眞田博士、

課長、前の河港課長永井氏など、川崎市の土木課長相馬氏なども珍らしい、民間方面の人で浪人が割合に少いのは不思議な程であつた。

○

車内では例によつてビール、サイダー、菓子、菓物などが雜然と配られる。此は毎年の常例だが實は一行に取つて少しも有効な事ではない。一行の人名表や、視察すべき工事の説明書寫眞地圖土地の案内書などの整頓したものを配布される丈で充分だ。特に關東水力の一覽表は寫眞と圖面を挿入した實に氣の利いたものであつた。

○

銀色に輝く世界第一のサージタンクは數里の遠方から見られる、高崎をすぎて車窓に輝くものはそれである。默々として聳立せる二百六十尺の巨人が、關東平野に向つて何をか暗示してゐるもの丶様である。

人跡未踏の上越の山々から集まつた、大利根の流れは一度此のタンクを潛つて四百餘尺を直下し五萬五千キロの佐久發電所となつてゐるのである。

○

澁川から佐久發電所に自働車を驅つた一行は先づ清洒な發電所建物内に案内された、所謂ワンフロアー式の構造で發電機はキレイにカバーされて、高い天井の下には轟々と廻轉の音のみが響いてゐる。

電氣設備に就ては鶴田氏から一々詳細な説明をされ、一行はクラブに引あげて休憩した。此のクラブ建物が山間には珍らしい鐵筋コンクリート造の文化式のものである。玄關を入つて廣間の正面に當社の社長淺野總一郎夫妻の寫眞大額を掲げてゐる。其夫人は今は故人であるが當發電所の佐久と言ふ名は實に夫人の名に因んだものである。淺野翁の人情味はこんな處にも發揮されてゐる。

○

クラブのベランダにはもう食卓の準備が出來てゐる、一同利根の清流を見晴して食事を終ると、談話室に集つて關東水力電氣會社の土木課長下田尾氏のサージタンクに關する講演を聞いた。懸軸になつたダイヤグラムに就て設計上の詳細な説明があつたが、神原氏と新井氏の二人から水力技術家を代表した様な熱心な質問が出る、井上秀二氏や山本新二郎氏などからも質問が出て時ならぬ講演氣分になつた。

○

大型鐵道機關車を通し得ると言ふ、大い水壓鐵管も銀色に塗られてゐるので、キラ々々とまぶしい位に太陽を反射してゐる。一行はガソリンカーに曳かれたトロリーに乘つて此白蛇の様な鐵管の傍を調整池まで登つて行くカーが停車すると、一行の眼前には調整池の堰堤が恰も長城の如くに横に續いてゐる。堰堤上に登ると其所は立派なホームである。兩側の手すりや照明燈柱やすべて都會の遊園地的な設備である。池水は漫々として赤城や榛

名の山影を投じ、遙に對岸を望むと綠樹の陰に農家の屋根さへ點綴されてゐる。何と云ふ自然の調和であらう、全く美的工事である。水力工事も此の程度ならば決して自然美を傷けるものではない。堰堤左端の滔々たるオバーフローの水煙を浴びながら一巡して發電所に引返し、其所で一同記念撮影をなし、自働車で澁川町に引返した。

○

澁川町の外れに東電の澁川發電所がある。五千八百キロワットの出力で、水量千二百、落差七十二尺と云ふのであるが。自働車から下りて直ぐ前の混凝土の建物に入ると、動かない發電機が室の中央に巨然と座してゐる。運轉休止中との事で閑靜なものである。電力過剩の東電では斯んな風に休止してゐるヶ所が大分あるとの事だ。最も休轉してる間に修繕工事などやるのであるが、此發電所の特色は上流草津溫泉から來る酸性分の爲に水車のランナー等が腐蝕される事である。或物は六ヶ月で使用にたへぬ樣になる、鑄鋼製は最も作用をうけ易く、含燐青銅製のものは耐久力も良いとの事である。

室外に出て上の水槽やサイホンを見學して此所を辭し、愈々榛名登山に移る。一行自働車を連ねて廣い新道に砂塵を飛して登る。伊香保近くなると新綠の中に紅いツヽヂが今を盛りと咲競ふてゐる。伊香保で自働車を乘かへて關東鋼索のケーブルカー停車場につく。

○

ケーブルカーは關西方面では盛んに建設されてゐるが、東京方面は割合に少い、筑波山や高尾山は知られてゐるが、關東鋼索は昨年出來たばかりで、乘客も珍らし半分に來る人もある。伊保香の町外からヤセオネ峠まで千四百尺餘をスルスルと十分間程で程るのである。以前は大汗をかいて胸を衝く樣な舊道を徒步で登つたものであるが、スピード時代の遞覽にはもつと迅いものが現はれるかも知れない。此は實に凉しい、自働車の中では汗ばんでゐた肌も、ケーブルカーの中では寒い位に感じた。ヤセオネ峠の終點から榛名湖まで自働車で一巡した組と、他の組は中川、那波、眞島、眞田、平井松村氏などで見晴臺に登つて海拔四千尺の淸氣吸ひ，其所を下つて那波博士の先導でケーブルカーの原動機室を見學した

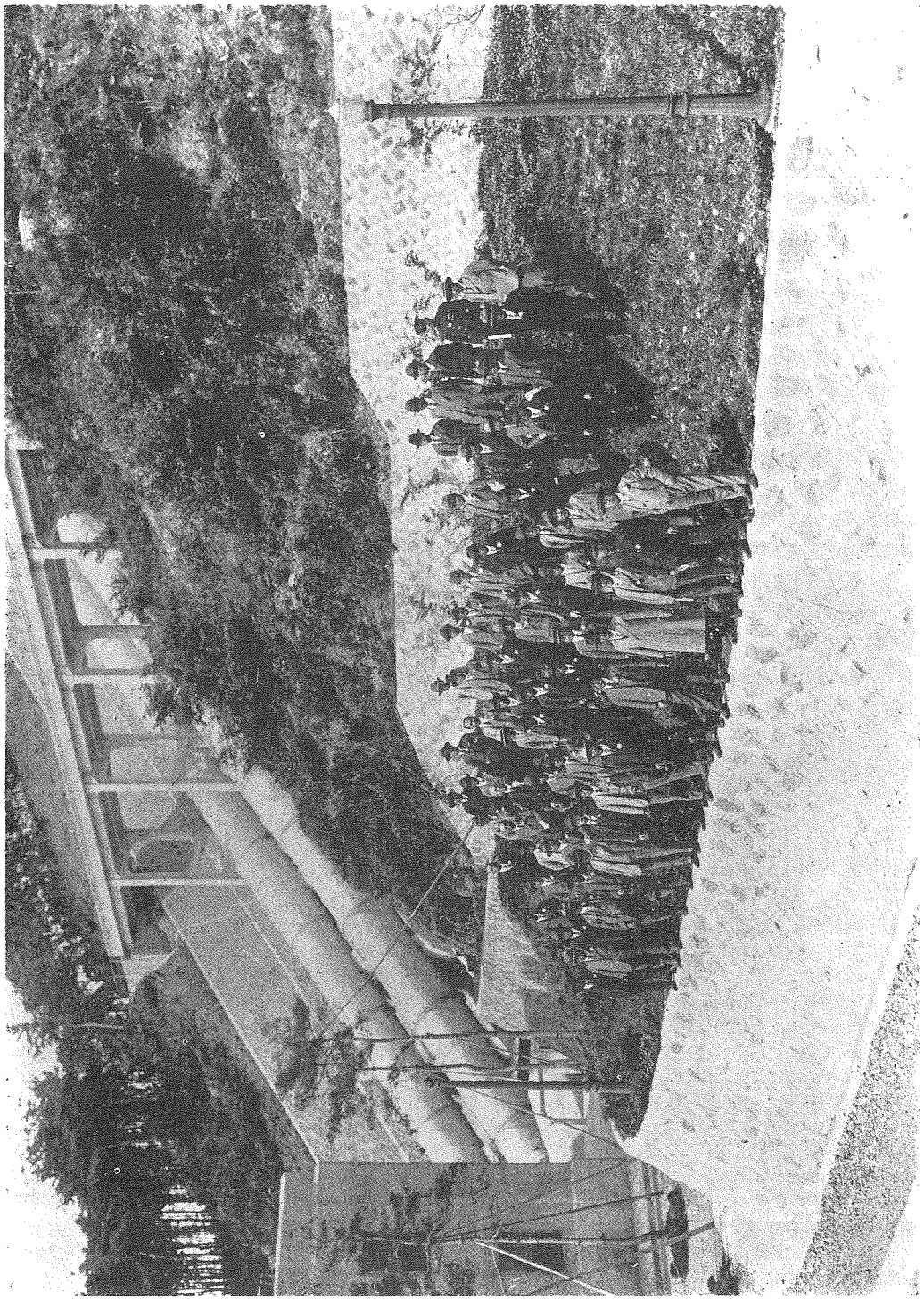
○

今日の一行の泊りは木暮金太夫旅館である伊香保の町は山の傾斜面に段々登りの溫泉旅館がギッシリ詰つてゐる。詩人蘆花が此地を愛した樣な落付いた感じは到底味はれない。洋服を脫いで一浴すると直に下の廣間で一行の懇親會が開かれた。席上を取持つ紅裙數十と名物伊香保音頭は東電と關東水力との好意によるものである。席上で中川會長の挨拶があり、夜の更くるまで賑はつたとの事である。記者は處用を帶びてゐたので翌朝一行と澁川驛に別れ正午すぎ歸京した。

○

澁川驛より汽車で淸水トンネル土合口工事視察に向つた一行は、午後四時頃坑內視察を終り電氣機關車に曳かれたトロリーに分乘して坑內を馳走中、突然一臺のトロリーが脫線して車上の人は列出され、線路に墜落負傷した人があり、サスガの技術家もトンネルに馴れない人達は災害的恐怖に襲はれたが、負傷者も少なかつたのは不幸中の幸であつた。稍重傷なのは小野基樹氏であつたが、鐵道省でも非常に恐縮して充分の手當をなし、目下新宿鐵道病院で治療中の由である。一種の災難とは言へ樂しかつた此の視察旅行の終を遂に此不祥事に會したのは何とも殘念な事である。因に當日の參加者氏名は次の通りである。

第十五回視察旅行參加者

新井　榮吉	井上　秀二	稻垣兵太郎
上野　有芳	小野　基樹	岡崎　保吉
岡村信三郎	片野　文吉	神原信一郎
川上浩二郎	喜多權次郎	高　敏郎
坂本　雅雄	眞田　秀吉	島　雅義
下浦　眞淸	白石　茂美	杉本好太郎
相馬　龍雄	田中　正夫	高木　義照
谷口　三郎	那波　光雄	中川　吉造
中倉專一郎	中山忠三郎	永井松次郎
西　義一	橋本　敬之	畠山　好伸
林　將治	平井喜久松	星野　茂樹
堀內　貞造	堀口　多吉	眞島健次郎
松村　務	三浦宇三郎	宮本武之輔
森　忠藏	森川　藤次	山本　信要
山本新次郎	山邊　芳雄	吉田　俊三
北村嘉太郎	山岸　倉藏	中川　一美
海老澤昇二	松本　利一	白石　益雄
小林　孝造	（其　他）	

佐久發電所視察の土木學會員（五月十日）